

校長室だより
NO. 37
平成30年11月5日

すべては光る

梅園小学校長
たか すりょうへい
高須亮平

「係」「役割」で生き方を考える

11月に入り、秋の読書週間になりました。私も本を読みましたので、その紹介をします。直木賞作家の西加奈子さんの短編小説『孫係』（『おまじない』筑摩書房、2018）はなかなか興味のある作品でした。短編ですので、わずかな時間で読めました。今回は、その『孫係』の内容をもとに人の生き方における「係」、「役割」の考え方について触れます。



西加奈子『おまじない』

主人公は「すみれ」という小学6年の女の子。家庭でも学校でもとても「いい子」で、友達にも「優しい子」である。ただ、当の本人は自分のことを「卑怯で冷たい嫌な子」と思っている。「自分はただ『いい子』に振る舞っているだけ」という自覚があった。仲のいい友達と朝から放課後まで一緒にいるときはしんどく感じていたが、絶対、顔には出さなかった。

そんなすみれに、自分の冷たさがさらに浮き彫りになる出来事が起きた。長野で大学教授をしている祖父が、仕事の関係で1か月ほど東京のすみれの家に住むことになったのである。祖父は、優しい人だが、すみれは遊んでもらった記憶がない。年に数回しか会わないのなら何の問題もないが、1か月も一緒に住むと思うと気が重くなった。

実際、すみれにとって祖父のいる我が家は住みにくいものになった。洗面所で鉢合わせすると「ひっ」と言ってしまう、夕食の時は作り笑いをしてしまう。口では「一緒に住めて嬉しい」と言っているのに、心の中では「あと何日」と思っている。そんな自分にまた嫌悪感を覚えるのだった。

ある日、帰宅すると誰もいなかった。思わず独り言をつぶやいた。「あ一人になりたいなあ」その時、祖父の部屋から音がした。「まずい、聞かれてしまった」と思った。そんな孫の気持ちを察した祖父は、部屋から出てきてこう言った。「私も一人になりたいです。早く長野の家に帰りたいです」そして、こうも言った。「すみれさんは私たちと似ていますね」

祖父の話によると、祖父と3年前に亡くなった祖母は、2人だけの時、よく悪態をついていた。仲良しの友達の悪口を言うこともあったと言う。すみれは耳を疑った。彼女にとって二人は上品で、素敵で、理想的な祖父母だったからだ。祖父は、「この家にいると疲れます」とか「娘（すみれの母）だから無条件にかわいいなんてことはないですよ」「子どもが生まれたら、ただちに母性が発動するわけじゃないと祖母が言っていた」「押しつけがあるからそうふるまっているだけ」と言った。そして「孫だから自動的にかわいいと思えないんですよ」とも言った。すみれは吹き出し、ついには爆笑し、祖父が好きになっていった。そして、祖父はすみれにこんな提案をして協定を結んだ。「あなたは『孫』という係、私は『爺』という係を、この1か月、きちんとつとめあげませんか。私の娘のために。あなたのお父さんのために」

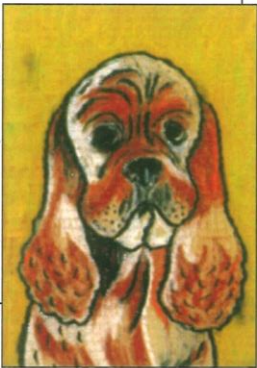
「係」という言葉にすみれの目が開いた。祖父の言葉は、すみれの心にしみた。それまでの悩みが吹っ飛んだ。その日から二人はそれぞれの係を忠実に立派にこなして、仲のいい爺と

孫の關係になった。そして、「夕方、二人で犬の散歩をするときだけ悪態をついていい。それ以外は絶対に人の悪口は言わない」というルールを決めた。

すみれは、学校でも係をきちんとこなした。「優しい友達」をきちんとやろうと思ったら優しくなれ、先生の前では「優秀なすみれちゃん」をこなした。ほめられたら「係をきちんとこなした」と思って、素直に喜んだ。そして、家で祖父とわくわくして悪態をついた。

祖父はすみれに言った。「私たちは、みんなこの社会で役割を与えられた係なのです」そして、「友達に優しくするのは、『友達に優しくする係』をきちんとこなしているのです。決して相手をだまして、それで得をしようとしているんじゃない。あくまで相手を思いやる気持ちからです」「『いい子係』をこなすのは涙ぐましい努力です。それは『いい子』のふりではなく、本当に『いい子』だからできるんですよ」と続けた。さらに、「悪態をつくのは本当に信じられる人にだけです。インターネットに書き込むなんてもっての外で、卑怯なことですよ」と加えた。

すみれは祖父の言葉を心から信じる事ができた。祖父があと1週間で帰ることを寂しく思い、1か月前の自分の気持ちが信じられなかった。そして、お互いの役割を思いやりを持ってこなす姿は素敵に見え、それができるのは立派な生き物と感じた。



このように要約を書いても、読む気持ちが薄れるようですが、一度、原文を読まれると、登場する孫の「すみれ」と祖父の「おじいちゃま」のやりとりが臨場感を持って感じられると思います。

この『孫係』は、短編小説集『おまじない』(全8作品)の1作品ですが、まさにその題名の「おまじない」という言葉に当てはまる内容のようです。自分が置かれてる立場は「係」と思うとやり遂げようと思える「おまじない」なのです。また、係とすることに対して「善と偽善」という、一段階アップした問いかけにも、自分が得をしようとか、相手を貶めようとするのとは違い、根底には「思いやりの心」があることが大切と言っていて、「おまじない」の意味を明確にしています。まさに、ここに西加奈子さんのワールドに通底していることを感じます。

具体的には、次のような人が生きていく上での「おまじない」とも思える魔法の言葉が、祖父である「おじいちゃま」の言葉としていくつも登場します。

「大抵は徐々にその場にあった自分らしくなってゆくんです。」

「私たちの体のすべてが私たちの意志で動くわけではないんですよ。何か大きなものに動かされているんだ。それを社会というのかもしれないがね。とにかくゆだねられるところはゆだねましょう。私たちは、この世界で役割を与えられた係なんだ。」
「それは誰かを騙しているのとは違う。騙して、それで得をしようとしているのではないのだから。……つまり、得をしようと思って係につくのはいけません。あくまで思いやりの範囲でやるんです。その人が間違っていると思ったら、そしてそれを言うことがその人のためになるのだったら言わないといけないし、相手を傷つける覚悟を持って対峙しなければいけない。でも、その人が間違っていないとき、ただ性格が合わないだけとか、その人の役割的にそうせざるを得ないんだなああと分かるときは、その人の望む自分である努力をするんです。」